

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 2 月 13 日

所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	齋藤 美保

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
日本 犬山
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
動物園・博物館実習
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 28 年 2 月 6 日 ~ 平成 28 年 2 月 9 日 (4 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
日本モンキーセンター 伊谷園長 新宅キュレーター 早川キュレーター
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の実習では、日本モンキーセンターにおいて様々な実習を通して博物館としての動物園の役割について学ぶことを目的として実習を行った。
<b>初日</b> 伊谷園長のレクチャーを通し、JMC の歴史、JMC がどのように日本の霊長類学の発展に寄与してきたのかを学んだ。お話の中で興味深かったのは、今まで話には聞いていた今西さんと伊谷さんの第一次アフリカ遠征が、名古屋鉄道からの資金で行われたこと、当初の目的は霊長類の調査だけに限らず、アフリカの哺乳類を日本に輸入するルートを作り出すことであった、ということだ。今でこそ PWS 含め様々な組織から私のアフリカでのキリン調査を支援して頂いている。しかし、その状況に慣れることなく、先人の方々の努力があってこそ今の私の調査ができることを忘れてはいけない、と実感した。また歴史ある日本の霊長類、野生動物研究の一員であることに対して、責任感を忘れることなく今後の調査を行っていきたい。 また JMC が日本唯一の登録博物館であること、他の園に先駆けて混合飼育を行っていたことなどを知った。日本の動物園において JMC が特殊な存在であることを実感した。
<b>二日目</b> 午前中は解剖実習を行った。学部時代にマウスの解剖は経験したが、それ以上の大きさの哺乳類の解剖を初めて見学した。今回の検体はメスのニホンザルで体の内部構造はヒトに非常に近く、その作りに感心するばかりであった。例えば、あの長い腸が腸間膜によって綺麗に腹部に収納されている様子、心臓の筋肉の厚さ、食べ物などが入ることを防ぐため気管の入口についている弁、気管が潰れないように軟骨がリング状に分布して管を支えている点、等々前知識は教科書などであったが、実際に自分の目でみると素直にすごい、面白い、と思えた。解剖のそもそもの目的は死因を調べることであったが、それ以上に色々な事を学ぶことが出来た。 午後は博物館として行うことのできる教育に関する実習を受けた。初めに赤見さんがお客さまに対して行ったレクチャーを見学させていただいた。お客さまの年齢層は小さな子、小学生から成人した方まで様々であった。なので、小さな子はすぐに話に飽きてしまう一方、大人の中には熱心にメモを取る方もいて、このように聴衆の集中力、興味にばらつきのある中で話をして、メッセージを端的に伝えることは難しい、と感じた。京大モンキーサロンも特に年齢層を設定せずに開催しているようなので、いつか私が発表をする際に、今回の雰囲気イメージして発表準備をする必要性を感じた。今回は年齢層が様々で当日 JMC に来園した方を対象にしたセミナーであったが、年齢層を決めたセミナーや、6 回コースという形態のセミナーも行っているようで、一般市民の方が自分の興味に合わせて選択できる取組は、いいなと感じた。 また学校の先生方が動物園は小学校低学年までのレクリエーションの場、という意識を持っており、その意識を改善するために、先生を対象に行っている教育活動があるようで、そのような取り組みを初めて知った。そのような取組、キュレーター、飼育員の方々の知識の深さを通じて、動物園はレクリエーションの場という意識が少しずつでも払しょくされていくことを期待したい。

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

### 三日目

午前中は獣医実習を行った。サルだけに限らず、こども動物園で飼育しているウサギやハツカネズミなど様々な種類の、様々な体サイズの個体を診察されていた。それぞれの個体に合わせて治療法を考えることは、非常に難しそうだったと思った。人獣共通の寄生虫やウイルスにかかる個体が JMC でもいるようだ。アフリカの野生動物は何を持っているかますますわからないので、今後の調査で今まで以上に野生動物との安易な接触は避けるようにしたい。

午後はエンリッチメント実習を行った。初めにチンパンジーの寝室に野生や果物などをすぐには見つからないように配置した。枯れ枝にフルーツをさすこともでき、その様子は野生と似ていいなと感じた。また私は消防ホースを初めて用いたが、いろいろな使い方ができるので、非常に便利な道具だと感じた。次にヒヒの運動場に入れるための木を掘りに行った。今まで天王寺動物園、京都市動物園、野毛山動物園で飼育実習をしたことがあったが、木を掘る作業は一度も体験したことがなかった。しかし、ヒヒにとっては色々な種類の木々が運動場に存在することで、味だけでなく、触った感触や匂いを楽しむこともできると思うので、土地に余裕のある JMC ならではの良いエンリッチメントなのでは、と感じた。

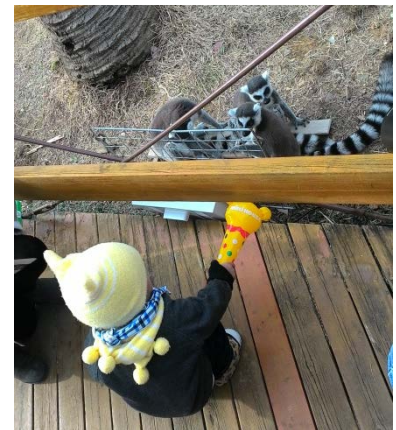
また現在の日本の動物園の問題として、エンリッチメントを園全体ではなく担当者に任せっきりであることから、担当替えなどが起こるとエンリッチメントがなくなってしまうという事象を知った。そのような事態を防ぐために、園として個々のエンリッチメントを把握するシステムづくりの重要性を認識した。

### 最終日

新宅キュレーターの指導のもと標本実習を行った。標本が論文のサンプルとして使用された場合、その標本をできるだけ長く保管する必要があると聞いた。JMC のように研究が盛んに行われて、かつ年間 50 から 80 体の解剖を行うところでは、スペース管理が大変そうだと感じた。実際、標本管理庫はあと少しで残りの空いているスペースが埋まってしまうようだ。

今まで骨に関して知識が全くなかったが、人の骨は 206 個前後、サルの骨は 206±尾の部分で 220 から 230 ほどであることを学んだ。人間とサルの体の構造が非常によく似ていることを、解剖実習からだけではなく、標本実習からも理解することが出来た。

実際にリスザルの骨をいじってみると、一つ一つの骨は非常に小さいがそれぞれに特徴があり、どの部位の骨か識別でき面白いと感じた。このような標本実習のワークショップを、小学校高学年くらいを対象に行うと、普段扱う機会の少ない骨を扱うことが出来ることに加え、JMC で実際に飼育されている生きた個体と、同じ種だが骨になった個体を比較することができ、彼らの動物に対する興味を引き出すことが出来るのではないかと思う。



左：獣医実習の様子 中央：ポリビアリスザルを用いた標本実習 右：Wao Land にて。来園者と動物の距離が近く驚いた。

### 6. その他 (特記事項など)

実習生を様々な面から全面的にサポートしてくださった、伊谷園長、新宅キュレーター、早川キュレーターに感謝申し上げます。またそれぞれの実習で指導してくださった、岡部様、高野様、赤見様、木村様、綿貫様、アフリカ館の飼育係の皆様へ感謝申し上げます。最後に本実習は、PWS リーディング大学院の助成を受けて行われました。プログラム関係者の皆様へ感謝申し上げます。